

「我－汝」問題の生命システム論

坂本 一寛 (Kazuhiro SAKAMOTO)
東北大学電気通信研究所

本稿は、愛という自己と世界/社会との関係についての概念/問題を、生命システム論、つまり、脳ないしはロボットにおける情報処理・制御の問題として捉えることを試みる。

生命システムの情報処理・制御が直面している問題の多くは、与えられた状況から一意に状態を決定できない不良設定問題である。不良設定問題を解くには、拘束条件と呼ばれる適切な内部規範原理が必要となる。では、脳の情報処理・制御の解明やロボットの技術が格段に進んだ場合、最終的にどのようなことが問題となるだろうか？

SF アニメを例にとると、ロボット軍団が人類社会に反旗を翻すといったストーリーもしばしば見られる。そこには明らかに、社会の利益とロボットら自身の利益の間に相克が見られるが、両者の間にどう折り合いをつけるかという問題は、一つの不良設定問題と見なすことができる。つまり、これらロボットが反乱を起こしたのは、拘束条件、つまり内包する規範原理が適切ではなかったと考えられる。このような問題に対して誰しも思うことは、「愛」を備えたロボットを作ればよいのだということであろう。では、世界/社会と自己との間に調和的な関係を構築するための原理は、どのようなものであろうか？ そこにおいて「愛」はどのように捉えられるのであろうか？

実世界における脳・生命システムの直面する問題について、清水博は、その本質的不可知性すなわち決して規定できない側面を指して、無限定環境と呼んだ。生命システムの抱える不良設定性は、実世界が無限定環境であることによる。では、生命システムは、無限定環境に対しどのように向き合うべきなのだろうか？

実世界と生命システムの関係性は、本質的に規定できないのであるから、実世界とある固定された関係にとどまっていることは、生命システムにとって非常に危険であろう。どんな状況になっても、古い固定された関係性を打破し、新たな関係を築く原理が備わっていることが望ましい。一方で、実世界と首尾一貫した関係を築き、その中で確固たる地位を占め、自らの存在を確かなものにしたいという基本的要請もあるであろう。

無限定環境という概念と、哲学・宗教でいう「我－汝」の問題における「汝」とはよく対応する概念である。「我－汝」の問題とは次のようなものである：①我は世界と2通りの対し方がある。1つは、「我－それ」という関係の仕方であり、「それ」は我にとって規定されたものである。もう1つは、「我－汝」という関係で、「汝」は本質的に規定されない；②「我」は「我－汝」という関係を通じて充足にいたる。

「汝」とは本質的に規定されないものであるという点で、無限定環境のことであると見なしてよい。無限定環境は、無限定であるから非可算・非可換であるが、その点

も「汝」と同じである。

しかしながら、世界への対し方としての「我—汝」と述べると、「汝」を求めてやまない「我」の側の積極性を感じてしまう。そればかりではなく、「我—汝」という関係を通じた充足”に至っては、サバイバルといったニュアンスを含む“無限定環境への適応”とは違った印象を受ける。

そもそも、本質的に知り得ない「汝」に向かいあったところで、何か得られるわけではない。けれども、「我—汝」関係において「我」には積極性があふれている。これは、無償の愛、「与えること」としての愛とよく符合する。

振り返って、変わらぬ「愛」の本質をつきつめてみると、ひたすらに「与えるもの」、無償なものであり、何か見返りと求めるものではない。その向かう先は、本質的に規定/記述不可能で、それ故にかけがえのない非可換な汝となるのである。

ここでいう「与えること」、見返りを求めないことというのは、A という行為を行うと X という結果が得られるだろうといった予測一般と見なしてよい。「与える」行為は、X という結果を得ることが期待できないから A を行うのはやめよう、という消極的態度を回避することにつながり、状況が変化した場合、世界との固定/規定された関係から脱却できる必要条件を与え、生命システムに無限定環境への新たな適応を可能にするのである。

「汝に与え」続けることができるみなもとは、本質的に不可知である汝に向かい合うことの本質的矛盾である。つまり、知らないことを“知っている”という矛盾が、固定/規定された世界への知識や関係を壊すことを可能としているのである。

一方で、汝に与えるものとしての愛は、私の存在の確からしさという思わぬ副産物をもたらす。かけがえのない世界/汝と規定されない関係になることにより、自らにも非可換性、つまり、存在の確からしさがもたらされるのである。そればかりではなく、世界の要求と自らの要求の間の相克が解消され、「我」は新たな力を得るのである。

再び、反乱ロボットを考察すると、燃料などを報酬に見立てた拘束条件/規範原理をロボットに与え、その報酬さえ人類側が握っていれば、ロボット軍団を自在に操れるという考えでは、これら優れたロボットのガソリンスタンド襲撃計画を阻止することはできない。そうではなく、このようなロボットが備えるべき最終的拘束条件/内部規範原理は、無限定環境に見返りを求めず働きかける態度、つまり「汝に与える愛」といったものであるべきなのである。

このような究極のケースを考えなくても、本質的に規定不可能なものに向き合う、つまり知らないことを知る原理は、結局は、無限定環境で確実に存在するシステムのひとつのカギとなると思われる。例えば、実世界でロボットが活躍するには、ロボットが自ら“why?”と思い、問題を解決していくことが重要な要素となるであろうが、“why?”といった疑問文はまさに規定不可能な「汝」に投げかけられたものであるからである。